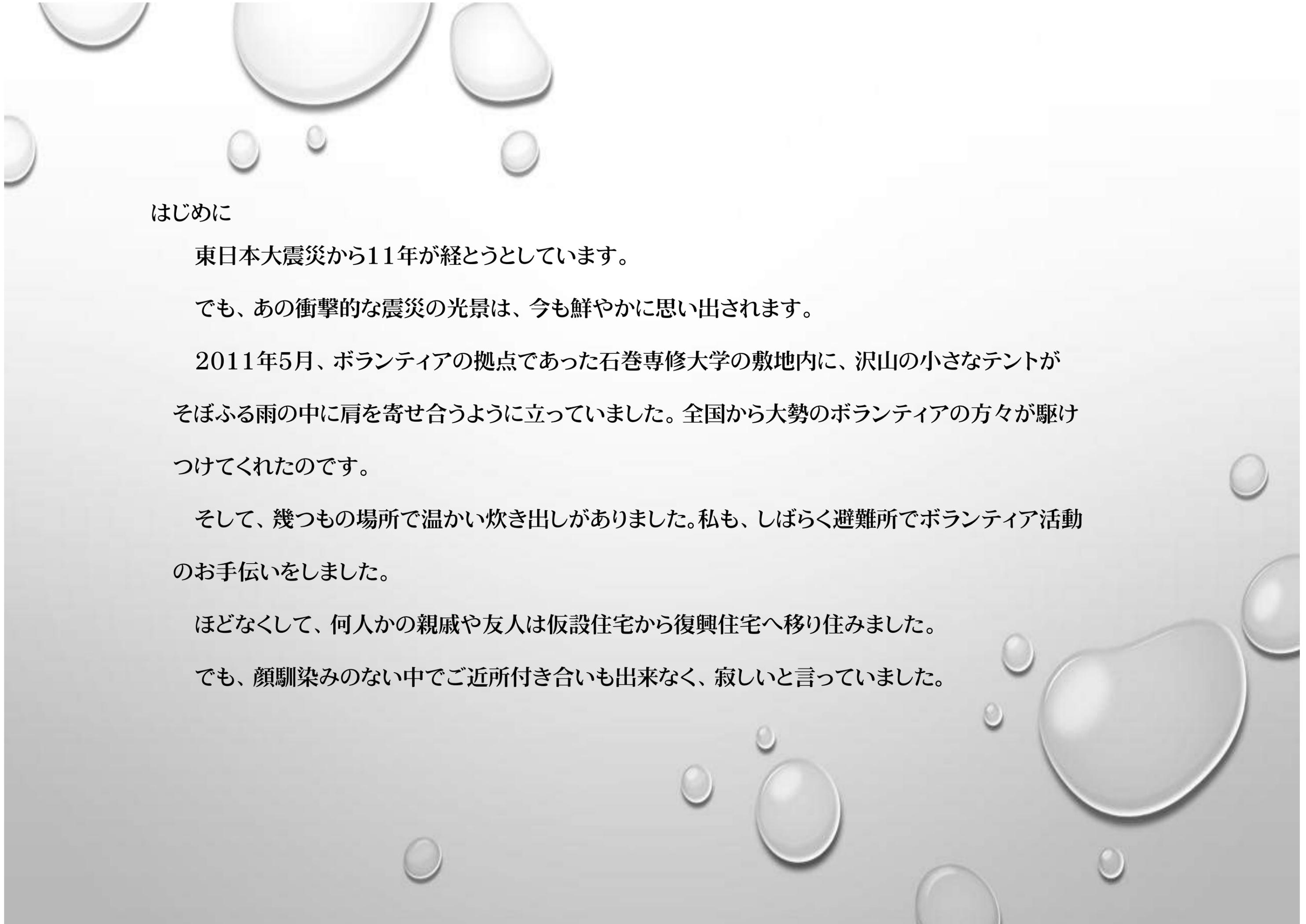


東日本大震災 石巻 被災の記録

# 私のふるさと

～ こんなに 広く  
静か だったかな ～

**Campus**<sup>®</sup>  
SKETCH BOOK

A light gray background with several realistic water droplets of various sizes scattered across it. Some are large and prominent, while others are small and subtle. The droplets have highlights and shadows, giving them a three-dimensional appearance.

はじめに

東日本大震災から11年が経とうとしています。

でも、あの衝撃的な震災の光景は、今も鮮やかに思い出されます。

2011年5月、ボランティアの拠点であった石巻専修大学の敷地内に、沢山の小さなテントが  
そぼふる雨の中に肩を寄せ合うように立っていました。全国から大勢のボランティアの方々が駆け  
つけてくれたのです。

そして、幾つもの場所で温かい炊き出しがありました。私も、しばらく避難所でボランティア活動  
のお手伝いをしました。

ほどなくして、何人かの親戚や友人は仮設住宅から復興住宅へ移り住みました。

でも、顔馴染みのない中にご近所付き合いも出来なく、寂しいと言っていました。



石巻の漁港には、沢山の水産加工場があり壊滅状態である  
解雇された人が多く、今からの生活のめどはたっていない  
鯨の大和煮の缶詰のオブジェがゴロリと転がっていた

## 東日本大震災

2011年（H23）3月11日（金）PM2時46分

宮城県牡鹿半島東南東約130km 三陸沖を震源とするマグニチュード

9.0 激しい横揺れの巨大地震が発生した

PM2時50分 大津波警報発令 地震直後に電気が切れた

PM3時40分 第2波とされる大津波・3時50分には第3波と  
みられる巨大津波が来た！

家屋や車両、船が木の葉のように浮き沈みを繰り返し、「ゴォー、バリバリ」という轟音とともに押し流される！

橋をも飲み込んだ波は、渋滞で橋上に並んでいた車をも、大波と共に川に落下。石巻の中心街も濁流の中に孤立。川沿いの民家から煙りが上がり、近くの車からけたたましくクラクションが鳴り続ける。その間にも流れるがれきが「ギギー」とこすれ合う音がする。雪が降り出した。



実家の近くの家。2階屋の屋根まで吹き飛ばされている！

叔父の家があった所は、がれきの山で家は流された。

当時、叔父は入院中で、自宅に叔母1人がいた。津波で2階ごと流され、波が引いた時、運よく引っかかって脱出できた。下半身ずぶ濡れの状態で小学校に避難。着替える服もなく、沢山の避難民のため座る場所もままならなかった。

その後、叔母は錯乱状態になり今やっと落ち着いてきた。

従兄弟・親戚の家は床上浸水。屋根も地震で壊れる。

地盤が沈下し、家は傾いている。満潮になると塩水がわき出て床下に入って来る。避難所にいるよりはいいと、自宅にいる



叔父の家の跡地 色々な物が山となって積み上げられていた



私の実家のある地域は、すぐ海の近くなので全滅です。沢山の方が亡くなりました。従兄弟も3週間後、遠く離れたがれきから発見されました。

大震災から1ヶ月半、道路のがれきは除かれていましたが、後は手つかずの状態で、骨組みだけの家やがれきがそのままの状態でした。人っこひとりおりません・・・廃墟です。ヘドロの匂いが充満しています。

地元新聞の死亡欄に友人の名前を見つけました。近所で店をやっており、もちろん家は跡形もなく、奥さんと娘さんも亡くなったと聞かされました。

何で逃げなかったのかな！ 何で逃げなかったのかな！





津波で流されたのではなく、地盤沈下で水没していた

友人 A は、職場の友人の家におり被災。自宅に戻れず近くの小学校に避難  
3 日間は、救援物資なく、持っていたせんべいをみんなで少しずつ食べていた。  
4 日目、自衛隊の人から、冷たいけどおにぎりをもらった時は、うれしくて涙  
が出、深く自衛隊員におじぎをした。自宅の 1 階の半分まで水没。水が引いた  
跡はヘドロが蓄積していた。後かたづけに 1 ヶ月半を要した。

友人 B は、自宅で被災。1 歳と 3 歳の孫を預かっていた。泣き叫ぶ孫を両脇に  
抱え、階下の姑に「避難命令が来ている逃げるよ！」と言っても、姑は後始末  
するからと動かず、ちょうど帰って来た夫に姑を頼み、ミルクと毛布とお湯を  
持って 5 人で車に乗った。渋滞で前に進めず間道を通り逃げ延びた。自宅は、  
天井近くまで浸水、全壊状態。昨年自宅を修理し、冷蔵庫も買ったのにと・・・

友人 C も自宅で被災。大津波警報が出たが、まさかここまで来ないと思っていた。  
夫はバイク屋さん、塀に上がって海の方を見ていたら方向違いの川を遡っ  
て来た津波に店は水没。今でも「まさか」と信じられないと。  
ライフラインが止まり、石油ストーブの上でご飯を炊いた。水が引いた跡、行  
方不明の親戚の人を探し回っていたと。



津波がどんなふう襲ってきたのか、よく分かる。土台だけ残っている



電信柱もなぎ倒された・・・ひとりひとりの家での生活があったのに・・・



車がおもちゃのように波に翻弄されていた。沢山の車が廃車になった



この先には道が続いていた。ずっと先まで・・・今の海はおだやか



まさしく廃墟である  
何の音も、人影さえもなかった  
沢山の家々があったのに、だだっ広く  
風景は変わり果てていた  
「止まれ」の文字がむなしく  
感じられる

親不幸な話だが、両親が他界していて  
良かったと思った  
石巻は平野なので、数キロ先まで津波は  
押し寄せた。1時間という限られた時間の中で、  
逃げおおせられたかと思うと疑問である



## 友からの助言

- 1, 地震後、電気が止まり情報が分からなかった。防災放送も聞き取りにくかった→車のラジオを聞く。ラジオと乾電池を用意しておく
- 2, 避難命令が出たら、躊躇することなく高台へすぐ逃げる。その時、車に固執しないこと（渋滞にはまり動けなくなる）
- 3, 最低3日分の食料と水を用意する
- 4, 水が止まる前に、できるだけ確保する（飲料・水洗トイレ用）
- 5, いつ地震津波が来てもいいように、家具の固定・避難袋の用意をする



こんなに、ふるさとは広がったかな？こんなに静かだったかな？  
私の生家

おわりに

2019年9月、やっと開通した三陸鉄道に乗って、青森から岩手、宮城と南下の旅をして来ました。震災から8年も経っているのに、ダンプカーが砂煙をあげて走り回っています。見上げるほどの防波堤は、まだまだ未完成です。

30年前に住んでいた大船渡に着いた時は、啞然としました。家並みが消え、更地が広がり、自分は何処に立っているのか分からないのです。私の第2のふるさとも消えてしまったと思いました。

10年を経ても癒えることのない悲しみ、辛さ。それでも、震災を乗り越えて前を向いて歩こうとする、ふるさとの人々の強さも感じました。

2022年3月 発行

著 者 中北京子

発行者 みえ防災コーディネーター志摩の会

協 賛 志摩ロータリークラブ

※みえ防災コーディネーター志摩の会の活動には  
赤い羽根共同募金の助成をいただいています。



